自由気ままに淡々と過ご…せればいいなぁ…

暁牡丹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日々を淡々と、何気なく過ごしていると思う…

〝俺は何のためにいきているのだろう…〟と

他人から見ればとても馬鹿らしく思えることかもしれない。

けど、俺にとっては気になってしょうがないことだった。

…そんなことばかり考えてからだろうか…

ある日、罰が当たったんだ。

〝死〟という形を以て…

目が覚めれば、目の前には顔が見えるかどうかといえるほど巨大な〝ヒト〟が立っていた。

そして、あまりの衝撃的な光景に呆けている俺に目の前の〝ソレ〟はこう発した。

「我はこの世界で唯一最強の存在であり、行く末はこの世界を手にするものである。

最強である我が名は〝アルトシュ〟、汝を作り出した汝の主人である。

我が目的のために我の手となり足となり、我に尽くすがいい。

今、アルトシュの名のもとに汝に名を授ける。汝は、最初番個体〝アズリール〟」

……ちょっと何言ってるかわからないです。

目　次

冴えない一般人が死亡フラグ満載の世界で生き残れるか……うん！無理！ ―――― 1
これって、死亡フラグ満載確定じゃないですか、やだ～ ―――― 4
運命の出会い？それは突然だったの♥（小並感） ―――― 7
だって、仲良くなりたかったんだもん、ちかたないね（。ω。） 13
アズ！ジブ！ラフィ！3人合わせて、仲良しシスターズ（嘘） 20
そのまま…止まるんじゃねえぞ… ―――― 26

冴えない一般人が死亡フラグ満載の世界で生き残れるか……うん！無理！

…その日は、雨だった。
台風が近づき視界が不良な中、とある1人の男性が自転車をこいでいた。
警察が見たらすぐに切符を切るだろう、片手で傘を差しながら片手でハンドルを操作している。そして、大学の帰りなのか大きなリュックを背負っていた。
「あー…こりゃ時間的に本屋に寄れないな…ったく、せっかく新刊買って家でゆっくり読もうと思ったのに。まさかの時間割変更だよ…」
男性は、時々愚痴をもらしながら、急いで家へ向かおうとしていた。
片手運転をしながら、ストレスをため、愚痴る…と、器用なことをしていた。
（こんな、なんも代り映えしない日々を過ごして、何か得られんのかね。
そも、俺がこうして大学に通って、理不尽な教授に不満を募らせ、大急ぎで帰る……
これに何か意味はあるのだろうか……いや、ないんだろうな。誰だっけか、
生きる意味は自分で探すってやつ…それっぽいけど、根本的になんも解決して
ないだろ。毎日、何の目的もなく、いや、確かになりたいなぁと思ってそのために
大学通っているけどさ、それとは別にやっぱり生きる意味って気になるじゃん。
全人類共通の的な。っていうか生きることってそもそもそんないいことなの？）
と、哲学的な、はたから聞いたら馬鹿らしい、そんなことを考える。

だからだろうか、目の前から逆走してくる車両に気づけなかったのは…

刹那、男性の視界はブラックアウトした。

(眠い…あ、でも目が覚めてきたかも…ちょっとまぶしいな…こんな夜中に……)

「ん?夜中なのに?おかし…………まぶっ?!」

あまりの明るさにそんな言葉が出た。

しばらく悶えた後、慣れてきた視覚で今の自分の現状を確認しようと視界を確認すると…

目の前には顔が見えるかどうかといえるほど巨大な〝ヒト〟が立っていた。

「………は?」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

(えっと………〝コレ〟は…なんだ?)

あまりの非現実な光景に頭が働かない。だが、それ以上に〝ソレ〟が

神々しく、そして恐ろしいと感じ、思わず悲鳴を挙げそうになった。

神々のいたずらかと思えるほどの完璧ともいえるその身体、見るものを圧倒させるそのオーラ、男である彼?から見ても見とれてしまう顔。

見るものすべてが見入ってしまうそんな不思議な魅力があった…別に、惚れてはいないが…

そして、あまりの衝撃的な光景に呆けている彼?に目の前の〝ソレ〟はこう発した。

「我はこの世界で唯一最強の存在であり、行く末はこの世界を手にするものである。

最強である我が名は〝アルトシュ〟、汝を作り出した汝の主人である。

我が目的のために我の手となり足となり、我に尽くすがいい。

今、アルトシュの名のもとに汝に名を授ける。汝は、最初番個体〝アズリール〟」

……ちょっと何言ってるかわからないです。

これって、死亡フラグ満載確定じゃないですか、やだ～

あの衝撃的過ぎて禿げそうな展開からしばらくして、アズリールは見晴らしのいい場所まで移動していた。周囲には、先ほどまでいた宮殿のようなものやその他の建物、先が見えない地平線？が広がっていた。

「さっきは本当にちびるかと思ったにゃ…この年で漏らしたとか、絶対笑いもの確定にゃ！それにしても、この声と口調…まさかとは思うけど、まさかなのにゃ？」

彼女はアルトシュとの邂逅の後、ついさっき自分の主に体の違和感に気づいていた。彼女はもともと男性であったがゆえに、その違和感への衝撃が大きかったようだ。

「いろいろと突っ込みたいけど、少なくともウチ、性別変わってるにゃ。元男として、なんというか…複雑な気持ちにゃ。それと、ぱっと見た感じ、この身体って…天翼種、そして、ウチの感が確かなら、総合的に考えて、該当するキャラは…」

様々な状況証拠から、自分の状態を推察した彼女は、わずかな予感を胸にたしかめようと近くの湖へと向かい、水面を除いてみると…

「あー、当たっちゃったにゃー、正直予感はしてたけど、当たっちゃったにゃー、ありえないにゃー。え？何にゃ、これは何の罰ゲームにゃ？しかも、さっきの巨じ…アルトシュ様がいるということは、もうほぼこの世界が何なのか確定してるんじゃないのかにゃ？もう、死亡フラグがビンビンにゃ。神様、ウチ、何か粗相をしでかしたかにゃ？」

自分の姿を確認したことで、彼女はどうやらこの世界がノーゲーム・ノーライフの世界であり、自分が十六種族序列第六位、天翼種であり、その実質長である〝アズリール〟となってしまったと確信したようだ。それにしても、そんなあり得ない状況でありながら、この小娘、意外と軽口を叩けるほどにノリノリであるように見える。

「そうかにゃー、なっちゃったかにゃー、なっちゃったもんはしょうが

ないにゃー。まぁ、前世は情報化が進んで、いろいろ面倒だったから、せっかく天翼種になったんだから、好きに生きるにゃあ、この状況に甘んじるにゃあ。（あ、でもしばらくはアルトシュ様に怒られない程度にしておくにゃ。）にゃーにゃー読書読書にゃー♪」

どうやら、見間違いではなかったようだ。想像以上に余裕があるようだ。もう、この先何があっても何とかなるような気がする。

――――――――――――――――――――――――

数万年くらい後？

浮遊大陸アヴァントヘイムの戦神のいる宮殿にて、戦神アルトシュと天翼種の長アズリールが相対していた。正確には、アズリールがアルトシュに跪いている。表情の見えないアルトシュに対して、アズリールには喜色の面が伺える。

「天翼種長、アズリールよ」

「はっ！」

「此度の、遠征ご苦労であった。汝と汝の率いる者たちによって、我の権威が更に知れ渡ったことだろう。次も期待している」

「はっ！主のご命令とあらば、このようなこと造作もありません」

「うむ。して、アズリールよ。今日、我は我の最大の力を以て、新たな天翼種をつくりあげる。そして、それが最終個番体となる。」

「最終個番体…ですか？（お？これは…）」

「然り。そして、この個体は他の個体と違い、不完全なものとする」

「………であありますか。」

「ゆえに、その個体の管理を最初個番体である汝に一任する。よいな？」

「了解いたしました。その任、わが命を懸けて遂行いたします。（まあ、懸ける気ないけどさ）」

数万年の間、アズリールは、アルトシュの許しが出た範囲で世界各地を飛び、視察という名の本の探索、閲覧を行っていた。その際、アズという偽名を使い、様々な種族と交流を行っていたとかいないと

か。その話は、またの機会としよう。そして今、主の命に従い、彼女も内心楽しみにしていたジブリールと対面していた。
「えーと、初めましてにゃ。ウチの名はアズリールにゃ。君の世話を任された、天翼種の中でも最も古参のものだにゃ。よろしくお願いするにゃ。（生ジブだにゃ生ジブだにゃ！かわいいにゃ！抱きしめたいにゃ！ぶっちゃけ嫁にしたいにゃ!!…はっ！確か、原作だとしつこくしすぎて嫌われてた気がするにゃ！危ない危ないにゃ……やっぱり、いくら天翼種といえども、前世の情報までは完全に覚えきれてないにゃ…あとで自作ノートを要確認にゃ…）」
「……」
「ん？どうかしたかにゃ？」
「…いえ、ただ他の天翼種の方々と雰囲気が違っていたものですから、気になって…」
「あー、まあこんな変人はウチくらいだにゃ。すぐ慣れると思うにゃ。早速だけど、アヴァントヘイム内を案内するにゃ。（困り顔のジブちゃんもかわいいにゃ……それにしても、感が鋭いにゃ。他の個体は全く気付かなかったのに、ちょっと気を付けるかにゃ。）」
「わかりました。よろしくお願いします。」
　最初は、ジブリールの観察眼に内心同様気味のアズリールだったが、どうやらうまくごまかすことができたようだ。これから、アズリールは主にジブリールと行動を共にすることが多くなる。彼らの明日はどのようになっていくのだろうか
「…あっ！ジブちゃん！実際は、ウチも含めたすべての個体は姉妹みたいなものにゃ！だから、ジブちゃんもウチのことおねえ「嫌です（遠慮しておきます）」本音と建前が逆じゃないかにゃ…」
　どうやら前途多難なようである

運命の出会い？それは突然だったの♥（小並感）

とある日の昼下がり、幻想種なアヴァントヘイムにてアズリールとジブリールは、他種族の偵察とは名ばかりのＯ・ＳＡ・Ｎ・ＰＯに繰り出していた。ちなみになぜかと問われれば、単純明快、アズリールがジブちゃん（図々しい）と一緒にいたかったからである。

「ジブちゃん！今日は人間達の偵察に行くにゃ！」

「人間たちの…ですか。はて、私の記憶が正しければ、人間という下等種族は全種族の中でも最弱であり、何をせずとも絶滅するのは時間の問題であったと思いますが、わざわざ偵察を行う意味があるのでしょうか？」

「にゃ～、ジブちゃんの言いたいことはわかるにゃあ。（相変わらずの他種族の見下し様だにゃ。元人間としては、反論したいところだけど、『最弱』なのは事実にゃ。でも、だからこそ、要注意なのにゃ…あと、そろそろ〝彼ら〟が現れてもおかしくないはずにゃ。個人的には、何とか被害を抑えつつ、あの結末をどうにかしたいにゃ。なぜなら、不肖このアズリール、バッドエンドが大嫌いだからにゃ！…さて、この差別主義の権化ともいえるジブにゃんをどうしようかにゃ…一応乗っとくかにゃ笑）人間は、魔法も使えず、頭も犬畜生以下、いやそれ以下かもしれないにゃ。存在自体そこらのごみ屑と何ら変わらないにゃ。」

「でしたら「でもにゃ！」…」

「最弱だからこそ、最弱なりにやり方があるのにゃ。弱いからと見下していると……足元救われるぞ、ジブリール」

「…?!……まるで、経験があるかのように言いますね…まさか、天翼種の長とあろう貴方が人間相手に敗北したことがあると？」

「それはないにゃ。少なくとも〝戦闘〟だったら負けることは絶対ないにゃ。ただ、ジブちゃんだけは知っていると思うけど、ウチは、偵察という名目で、ほぼすべての他種族と交流してきたにゃ。それは、人間も例外じゃないにゃ。まあ、要はその時にとある人間に教えてもらったのにゃ。（まあ嘘だけどにゃ、ばっちりウチの考えだにゃ。ば

れたら、無事じゃすまないだろうにゃあ)」
「…人間ごときのたわごとを真に受けたのですか?」
「(面どくさっ!ここまでくると逆に感心するにゃあ)そうじゃないにゃ。例えごみ屑の意見でも、知識として蓄えておけばまぁどこかで多少、ほんのちょっと使える時があるかもしれないにゃ。だから、頭に入れておくに越したことはないのにゃ」
「…はぐらかされた気がしますが、まあ先輩の気まぐれはいつものことですからここは納得しておきます」
「ありがとうにゃあ!(なんだかんだジブにゃんはとても優しいのにゃあ。ん?このやり取り、まるで老夫婦見たいにゃ。つまり!ウチとジブちゃんは、知らず知らずのうちにそんな関係まで発展していたのにゃ?!…これは、もう結婚不可避にゃ!)」
「先輩?「式はどこであげるにゃ?!」…は?」
「…あ…こほん。気を取り直して、人間の偵察に向かうにゃ。場合によっては接触もあり得るから、そのつもりでオナシャスにゃ!」
「おな…?はい、分かりました。(本当によくわからない方ですね…)」

ここは、人間たちが住まう集落の1つ。そこには、片方の目を包帯で覆い、白髪で見えている目が死んでいる少年と身体のあちこちから機械が露出した機械仕掛けの少女がテントの中で話していた。
「くそっ!片目が見えねえだけで、こんなに不便になるとはな…人間不能すぎねえか?」
「ごめ、んリク。シュヴィ、は解析体だか、らその傷は、治せ、ない」
「あ?あぁすまんシュヴィ。そういうつもりで言ったわけじゃねえ。それに、解析体だからとかどうだっていい。お前は俺の〝妻〟だ。それ以上でもそれ以下でもねえ。ただ、俺のそばにいてくれれば、俺はそれで十分だ。」
「リク…ありが、とう。シュヴィにできる、ことを頑張、る」
「おう、それでこそ俺の妻だ」

「(おお～、なんともまぁ想像以上のおしどり夫婦っぷりにゃあ。甘すぎて吐きそうだにゃあ。あ、でも甘いものは好きだにゃ。最近は食べたことはないけどにゃ。それにしても、この時期でもうあんなに仲がいいのかにゃ？あまりのリア充オーラにウチの嫉妬パラメーターは有頂天にゃ。…いっそのこと集落ごと天撃で吹き飛ばしてやろうかにゃ？…冗談にゃ)」

　それを不可視の魔法により見えない状態で観察する2体の天翼種。アズリールとジブリールである。テント内で繰り広げられる甘々な空間に次第に耐え切れなくなってきた彼女いない歴年齢（笑）のアズリール、どうやら彼女にはカップルの会話でさえ刺激が強かったようだ。それを冷たい視線で見つめる後輩。方や様々な感情が絡まって興奮気味の先輩、覗きの視線に気づかずイチャイチャし続ける夫婦、これをシュールと言わずしてなんと言おうか。

「ふぅ…ちょっと気が動転してしまったみたいにゃ。」

「ちょっとではない気がしますが。」

「細かいことはいいのにゃ。じゃあ、早速彼らに接触するのにゃ。一応、人間に変装してあたかも旅の人であるかのようにニにゃ。」

「…接触する必要があるのでしょうか。片方の人間はどうみてもひ弱ですし、機凱種の少女は、解析体であるようですし、全く接触の意図が見えません。しかし、個人的にはあの機凱種の少女にとても興味がございます。感情を持った機凱種などこれまでに見たことも聞いたこともございません！もし、生首持ち帰り禁止令がなければ、ぜひ、あの首を持ち帰りたいものです。」

「絶対ダメにゃ。破ったら5年間の監禁にゃ。(ホントに天翼種って狂人しかいないのかにゃ？あらかじめ、先手を打っておいてよかったにゃ。あの十八翼議会を説得するのには本当に苦労したにゃ。議論の中で、自分以外が殺戮マニアなあの空間、胃薬がいくつあっても足りないにゃ、病気にすらならないけどにゃ。便利だにゃ。(適当))」

「っち！分かりました、ではここにいるのも苦痛なので、さっさと接触して情報を得てさっさとかえりましょう。」

「そこー、舌打ちはいけないのにゃ。っていうかどんだけ人間が嫌い

なのにゃ（この娘と言い、他の天翼種と言い、頭固すぎにゃ。せっかく知能は高いのに、いろいろと台無しにゃ。それに比べて、ラフィちゃんは物分かりが良くて賢いのにゃ。天翼種の中で数少ない癒し枠なのにゃ。）じゃあ行くのにゃ！」

――――――――――――――――――――

夜を迎えた人間の集落にて、人間へ魔法によって変装した天翼種の仲良し（笑）２人組は、リクとシュヴィのいるテントの前までやってきた。ちなみに魔法感知の対策は万全である（とはアズリール談）。
「夜分遅くにすいません。少しよろしいでしょうか？」
「ん？なんだ？お前たちは、別の集落の奴らか？」
「はい、他種族の戦闘範囲から逃れつつ、ここまでやってきました。途中まで一緒にやってきた者たちもいたのですが、地精種と森精種との戦闘に巻き込まれてしまい…その…」
「…なるほどな、それは、まぁ大変だったたな。俺らもそんな資源があるわけでもないが、後数人くらいなら匿える余裕はある。どうする？」
「ぜひ、お願いいたします。ですが、只でさえ少ない資源を私たちに恵んでくださるのですから、私たちにできることがあればなんでもさせてください。それと、ともに行動するのは数日で結構です。皆さんの迷惑になりたくないので、それ以降は私たちでなんとかやっていきます。」
「…そうか、あんたらが決めたんならなんも言わねぇよ。手伝いだが、まぁなんかあればこっちから声かけるから、ひとまず休んだらどうだ？長旅で疲れただろうしな。」
「ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます。あ、自己紹介が遅れました。私はアズ、こちらはジブ、短い間ですがよろしくお願いしますね。」
「…よろしくお願いします。（はて、隣で上品な話し方をしているのは誰でしょう？先輩と一緒だったと思いますが、私の目もとうとう腐りましたか。）」

「おう、俺はリク、んで…中にいるのがシュヴィだ。まあよろしく頼むわ。」
「シュヴィ…よろ、しく。」

――――――――――――――――――――

ファーストコンタクトに成功し、しばらくやっかいになることになった天翼種の2人。彼女らは、朝早くにテントを出て、集落の人気のない場所まで移動していた。しかし、ジブリールの表情は固い。
「ふにゃー、やっとスタート地点にたったにゃー。あ、ジブちゃん！魔法で防音対策もばっちりだから、しゃべっても大丈夫にゃ。」
「…先輩、１つよろしいでしょうか」
「ん?なんだにゃ?ジブちゃんの言うことなら可能なら何でも聞くにゃ。」
「では…あの集落、彼ら以外に人の気配が皆無でしたね。」
「…そうだにゃ。」
「なぜいなかったのでしょう。」
「………さーて、なんでかにゃあ?」
「………先輩」
「……」
「…しくじりましたね?」
「なんでにゃあ、なんで感づかれたにゃあ、魔法探知もばっちりだったはずにゃあ!なんでにゃあ!にゃあにゃあにゃあ!」
「それは「設定が怪しすぎるからに決まってんだろ?」…」
「にゃ?!なんで聞こえ……あっ、あまりに興奮しすぎて魔法きれてたにゃ。」
「……はぁ」
岩陰から現れたのは、昨晩対話した人間のリクと機凱種のシュヴィだった。
ちなみにアズリールのポンコツ具合は健在のようだった

「あんたら、仲間と来たって言ってたけどよ、ここら周辺、激戦区なんだわ。何の武器も持たずにたどり着くこと自体不可能だ。そして、集落だってあの規模になってくるとぜってえばれる。そこを不自然に思わねえ奴が生き残ることはまず不可能だ。」
「……」
「後、魔法探知対策完璧とか言ってたけどよ……漏れてたぜ？」
「にゃ?!にゃんですとー?!ジブちゃん！なんで言ってくれなかったにゃ！」
「すでにばれているのに訂正する必要がありますか？あるのでしたら納得のいく説明をどうぞ。それと、先輩のその表情を見れると思うと、ええ、面白いですね。」
「か、確信犯にゃ！Ｓにゃ！ドＳにゃ！ひどいにゃあ、こうなったらジブちゃんにはハグのｋ「なあ」にゃ？」
「あんたら……なにもんだ？少なくとも人間じゃあねえな。何が目的だ。」
「返答次第、じゃ、ただじゃおか、ない。」
「……」
「（もう色々やっちまったにゃ、万事休すにゃ）」
「…おい、おまえ「…にゃ」あ？」
「お前たち人間に、この天下無敵の天翼種のウチとジブちゃんがが手を貸してやるにゃ！」
「「……えええええええええええ?!」」
「はぁ」
　彼女たちの明日は天国か地獄かどっちだ！

だって、仲良くなりたかったんだもん、ちかたないね（。ω。）

人間の集落のはずれにて、2体の天翼種が1人の人間、1体の機凱種と対峙していた。お互い一歩も動かず、相手の出方をうかがっているようだ。しかし、それぞれの表情は様々であり、天翼種の片翼はこれ以上にない絶対零度の視線をもう片翼に浴びせている。

その視線を受けている片翼は、誰がどう見てもわかりやすい滝のような冷や汗を流していた。対して、1人と1体のペアはその様子を困惑の表情と共に観察していた。なぜ、こんなことになってしまったのか、それは言わずもがな、天翼種の長（失笑）の発言によるものだった。具体的に何を言ったのかは、前回のお話を読んでほしい。だが、分かってほしい。彼女（失笑）は別に悪気があったわけではないことを…

……人間のリクと機凱種のシュヴィにまんまと嵌められた天翼種の長（爆笑）。

「にゃ?!今誰かに笑われた気がするにゃ！誰にゃ！おとなしく出てくるにゃ！このアズリールが成敗してくれるにゃ！……はっ！」

「「……」」

「えっと、その…あの…つまり、助けてやると言っているのにゃ！」

「さすがに無理があると思います、先輩。」

「うぅ…辛辣すぎるにゃあ、お姉さんはとても悲しいにゃ…でも！ジブちゃんがお姉t「言いません。それに先輩がどう思おうがどうでもいいです」流石にひどすぎだにゃ！え？何にゃ？ウチ何かジブちゃんの不快になるようなことしt「ええそれはもううんざりするくらいに、一度自分の行いを顧みてはいかかでしょう？特にここに来る時から」…はい…ごめんなさいにゃ。」

「…なあ…話を戻していいか？」

「だそうですよ？先輩？」

「……何にゃ？ウチは今すごーく傷ついているのにゃ、特にメンタルがデストローイなのにゃ。もし、下らないことなら只じゃおｋ「先輩？」何にゃあ？ウチはとても心が広いから応えられることならなんでも答えるにゃ！」
「あんた…苦労しているんだな…」
「人間ごときに同情されるのは癪ですが、ええ、全くその通りです」
「可哀想…」
「もう進めていいかにゃ?!これ以上はホントに心がもたにゃいにゃ！」
「……噛んだな」「噛んだ」「噛みましたね、それはもう盛大に」
「……にゃあああ！（ ；ω；）」

「…で、何がどうなってあんたらが協力してくれんだ？俺らの目的を知ってんのか？」
「先輩？どうなのですか？」
「（……皆が平常運転なのがつらいにゃ。それにしても、ここで星杯の話を持ち出していいのかにゃ？今の時期には、何だったかにゃ…もう！ホントに原作知識だけは覚えづらいにゃ！この後、本来ならジブちゃんがシュヴィを全力で潰そうとする。シュヴィは、最後の力を以て他の機凱種に意思を伝えるんだったかにゃ？うん、この場面は衝撃だったからよく覚えてるにゃ。そんな悲劇をウチが阻止できた？一応及第点かにゃ…それにしても、星杯はどうやって手に入れるんだったかにゃ？そこら辺の記憶が曖昧にゃ。できることなら、リクたちが星杯を手に入れらるようにサポートを…）」
「…先輩？」
「にゃ？…えーとなんの話だったかにゃ？」
「はぁ…しっかりしてください。なぜ私たちが人間ごときに力を貸さなければならないのかです。」

「にゃはー、ごめんにゃあ。ちょっと考え事してたにゃ。それで、理由？だったかにゃ？」
「ああ、なぜ俺らに力を貸してくれるんだ？」
「ふむ…（しょうがないかにゃ）君たち、世界を掌握しようとしているにゃ？」
「は？いや、間違ってはいないｇ「しかも星杯を使って」…なぜ知っている？」
「ウチらは偵察のために定期的に世界中を回っているのにゃ。それは君らも例外じゃないにゃ。まあ、偶然知ったのにゃ」
「だが、このことをシュヴィ以外に誰かに漏らしたことなんて…」
「我ら天翼種は精霊を他のどの種族よりも巧みに使えると自負しておりますので、盗聴などお手の物です」
「（ナイスにゃジブちゃん！）」
「…魔法…か。魔法は専門外だ。疑いの余地はねえな」
「シュヴィ、も高度、な魔法は使、えない」
　なんとか、本来の話へと移ることができたアズリール。だが、まだ互いに互いを警戒しており、交渉がどうなるのかは
　まだ誰にも分らなかった。
「いいかにゃ？そんな野望を全種族の中で最弱の人間がやり遂げようと画策している。これほど面白いことはないにゃ」
「ほう、お前らに取っちゃ、協力は暇つぶしだってか？」
「半分あたりで半分外れにゃ」
「あん？」
「確かに、最弱が世界を制すのは面白いし、正直滑稽に見えるにゃ。誰だって不可能だと思うにゃ。君と同じ人間もにゃ。でも、もしそんなことが可能なら、可能性が僅かでもあるのなら、懸けてみる価値はあるとウチは思っているにゃ。」
「…天翼種は頭のねじがはずれた狂ったやつばっかだと思っていたが、お前はその中での特に変わっているらしいな」
「どっちも否定できないにゃ。そういう君も変人じゃないかにゃ？」
「っは！違いねえな」

「それに、やり遂げられる策があるんじゃないかにゃ？」
「……どうしてそう思う？」
「別に大した理由はないにゃ。まあ強いて言うなら、目かにゃ。」
「目、だと？」
「そう、目にゃ。君の目は基本死んでいるｎ「余計なお世話だ」にゃはー、でも、その奥に何にも揺るがない確かな決意が感じられるのにゃ。ウチが思うに、強者の持つ自信あふれた目にゃ」
「おいおい、それは買いかぶりすぎだぜ？なんてったって俺は〝最弱〟の人間だかｒ「それはその通りにゃ」即答だな」
「でも、最弱だからこそやりようはいくらでもある、違うかにゃ？」
「……お前、本当に天翼種か？まあ、いくらでもあるは言いすぎだが、ああそうだ。俺は、どんな手を使ってでも星杯を手に入れる」
「じゃあ、ウチたちがその手助けをするにゃ！」
「だが、大丈夫なのか？お前らにはご主人様がいるんだろう？最悪ばれたら殺されんじゃねえか？」
「そこはウチに任せるにゃ。適当なこと言って抜けてくるにゃ！」
「（本当に大丈夫なのか？情報漏れたりしねえだろうな…）なあ、あんたはどうなんだ？さっきから黙ってるみたいだが」
「……」
「にゃ？……（あ！ジブちゃんのことすっかり忘れてたにゃああああああああああああああああ!!ど、どどどどうしようにゃ!!今の全部ばっちり聞かれてたにゃ!!こんなのはたから見たら反逆罪の何ものでもないにゃ！し、死んだにゃ…どうやって逃げようかにゃ…あーもう無理にゃあ、まさかのここでリタイアにゃ）」
「（あいつ、完璧に隣の奴の存在を忘れてやがったな…ったく、助ける義理はねえが、天翼種１体でも取り込めれば作戦は良い方にシフトできる。よし！）あーなんだ。アズのこｔ「私も参加させてもらいます」え？」
「にゃ？」
「先輩の言う通り、とても面白そうなので、それに感情を持った機凱種を間近で見られれば、何か未知のことが分かるかもしれませんし、こ

れでも天翼種は知識を尊ぶ種族ですので、未知のことには目がないのです」
「じゃ、じゃああんたも協力してくれるっつうことでいいのか？」
「そういっているではありませんか？あなたの耳は飾りですか？あぁ、人間ですものね、しょうがないですね（笑）」
「いちいち癇に障る奴だな。まあ、なんつーかよろしく頼むぜ。改めて俺はリク・ドーラだ」
「シュヴィはシュヴィ・ドーラ、よろ、しく」
「私はジブリール。こちらこそよろしくお願いいたします。精々あがいて下さいな♪」
「アズリールだにゃ。よ、よろしくにゃ」

――――――――――――――――――――――――――――――

こうして、ジブリールの助けもあり、無事協力関係へと至ったアズリール一行。その後、具体的な作戦会議は日が来たら行うということで、一時彼女らはアヴァントヘイムへ戻ってきていた。そこで、アズリールは先ほどから気になっていた、ジブリールの返答の真意について本人に聞くことにした。
「ジブちゃん、戻ってきたばっかりだけど、聞いてもいいかにゃ？」
「？はい、なんでしょう？」
「その、リクたちと対峙したとき、どうしてあんな返答をしたのにゃ？」
「あんな、とは？協力するということですか？」
「まあ平たく言うとそうにゃ」
「別に、単純に気になったからです」
「何がにゃ？」
「先輩も言っていたではありませんか。最弱が世界を手に入れる。不可能であることを成し遂げられたその先が知りたいのです。他の天翼種ではこうもいかないかもしれませんが、私にとっては、それが最優先なのです。おかしいですね、人間など下等で存在自体気にもなら

ないはずなのに……どうやら、私も変人のようです。良かったですね？変人仲間が増えて」
「ジブちゃん…一言余計にゃ……にゃはは、にゃははは」
「…フフフ」
「ずいぶんと楽しそうな話をしているじゃないか、アズリール、ジブリール」
「「……え？」」
　二人の仲が僅かに深まった？と思った矢先、２人が振り向いた先にいたのは、同じ天翼種であり、〝四番個体〟である「ラフィール」であった。目が合った瞬間、アズリールは、リクと対峙した以上に冷や汗を流し、ジブリールに至っては、目を逸らしている。
　ラフィールは、２人から目を離さずにじっと見つめている。
「で？人間の味方をするとは、どういう風の吹き回しだ？アズリール」
「えーっと、あー、にゃー（や、やばいにゃ！まさかのラフィちゃんに見つかっちゃったにゃ！ウチの唯一の癒しポジのラフィちゃんに！ここで選択を間違えたら、絶交間違いなしにゃ！ど、どうするにゃ！いっそのこと正直に話すかにゃ?!でも、それだと反逆罪で処されるかもしれないにゃ！うぅ～、どうすればいいにゃあ。）」
「（…とか考えているのでしょうね、先輩は。ですが、実際まずいですね。お姉さまは、先輩と違いアルトシュに絶対の忠誠を誓っているはず。長よりもというのは皮肉でしょうが、ここはどうしたら極刑を免れるかでしょうね。何らかの罰があるのは
　避けられないでしょう）申し訳ありません、お姉さま。これには海よりも深い事情がありまして」
「（…なんて考えているのだろうな、奴らは…全く、ジブリールはともかく、アズリールはいつも手間をかけさせる。〝本気〟の
　あいつは誰よりも優れているというのに、もったいない…と思ったのは何度目だったか。それにしても、人間相手に手を貸すか…
　最悪、アルトシュ様のお怒りを買うことになりそうだが、ふむ…面白いにかけてみるか。）お前たち、まずは落ち着け。その人間の件詳しく私に聞かせろ。興味が湧いた。」

「……え？」

アズリールとジブリールそれぞれ違った理由で動揺していた中で、ラフィールから発された一言。その予想外の提案に２人はしばらく呆然としていたのであった。

アズ！ジブ！ラフィ！３人合わせて、仲良しシスターズ（嘘）

リクとの協力関係を取り付けたアズリールとジブリールは、アヴァントヘイムへ帰還後、人間と協力関係となったことを同じ天翼種であるラフィールに知られてしまう。突然の登場に動揺していた２人だったが、そこにラフィールからの予想外の提案に２人は驚きはしたものの、素直に事情を話すことにした。

「ふむ、なるほど。つまり、お前達は、面白そうだからという理由だけで、敵の野望に加担するという本来なら処罰ものの裏切り行為を働いた、ということか。

「すごーくとげのある言い方な気がするけど、まぁザックリいうとそういうことにゃ。」

「申し訳ありません、ラフィール姉さま。私が不甲斐ないばかりに、先輩を止めることができませんでした。」

「にゃ?!じ、ジブちゃん！何あたかも自分は関係ないみたいなこと言っているののにゃ?!ジブちゃんも協力するって言ってたにゃ！むしろ、ノリノリだったにゃ！…逃がさない！逃がさないにゃ！逃がさないぞジブリールぅ！」

「?!な、何のことでしょう？私は、あくまで先輩に付き添っていただけです。先輩が１人で勝手に突っ切ったのでしょう？はて？面白そう？何のことだか私にはさっぱり…」

「にゃ?!（こ、こいつ…秒で裏切りやがったにゃ！）やっぱりジブちゃんは鬼にゃ！悪魔にゃ！ちょっと優しいな…とか、感心したウチが馬鹿だったにゃ！（何にゃ！原作の残虐さと何ら変わってないにゃ！）」

「（…少し、罪悪感がありますね）先輩は優しすぎるのです。そのようでは、天翼種の長は務まらないのでは？まぁ、元々長としての威厳などさほどありませんが（笑）」

「にゃにゃ?!…ジブちゃん！君は…言ってはいけないことを言ってしまったにゃ！ウチが密かに気にしていることをずばり言ってしまっ

たのにゃ！もうダメにゃ…もう我慢の限界にゃ！今ここでジブちゃんを再教育するにゃ！ウチの堪忍袋の緒がキレたにゃー！」
「…いいでしょう。私も先輩の奔放さにはうんざりしていたところです。ここで決着をつけて差し上げましょう」
「その慢心、後悔させてあげるにゃ！出力５０％！天ｇ「馬鹿者!!」ぶふぅ!!?!な、何するにゃ！ラフィちゃん！」
「何もクソもあるかっ!!貴様らはアヴァントヘイムを更地にするつもりか！」
「にゃ?!ら、ラフィちゃんには関ｋ「黙れ!!」ひでぶ!!!?」
「それとも、アルトシュ様の怒りを買いたいのか？」
「「……」」
「全く、お前達はいつもそうだ。少し、仲違いしただけで、過剰に反応して。しかも、大体が〝ノリ〟だから、なお！質が悪い。まあ、力を制御した攻撃だから、本気ではないのは分かるが。そして、アズリールもアズリールだが、お前もお前だ、ジブリール。お前は、狂人気質なところがあるが天翼種の中では数少ない常識枠だ。お前がしっかりしなければ、このアホは誰にも止めらｒ「ひどいにゃ」うるさい！」
「…ですがお姉さま。私が言ったところで、このアホは何もｋ「減らず口を叩くのはどの口だ？」や、やめへくだはい」
「あのな、お前たちは天翼種の中でも特別なんだ。お前たちが他の天翼種を率いていかなければならない。そのことを忘れるなよ？それと、お前達実は仲が良「こほん、分かりました。先ほどは失礼しました」分かっているなら良い」
「（特別と言ったら、ラフィちゃんも番外個体なんだけどにゃあ…）にゃあ、一周回って冷静になったにゃ。でも、おふざけにそんな本気になっｔ「ほう、まだ制裁が足りないらしいな？」ごめんなさいにゃ、ラフィールさん」
「はぁ、話を戻すぞ。その協力の件だが、私も協力しよう。「ホントかにゃ?!」あぁ、お前達だけだと不安しかない」
「（なんだかんだ心配してくれるラフィちゃん…天使だにゃあ）あ、でも、アルトシュ様にはどう説明するのにゃ？」

「説明？するわけないだろ？何だアズリール、死にたいのか？」
「じょ、冗談だにゃ」
「では、どうするおつもりで？長期間の留守は流石にまずいと思いますが、しかも番外個体が3体も抜けるとなると…1体は、一応長ですし…」
「…」
「そこは、それらしい理由で乗り切るしかないだろう。幸いなことに、我々はアルトシュ様の信頼も厚い。アズリールは特にな」
「なるほど、では、先輩次第ということですね」
「そういうことだ」
「…おーい、何ウチ抜きで勝手に話を進めているにゃ。全責任がウチに乗っかっているのは気のせいかにゃ？最悪ウチが消されるリスクがある気がするのは気のせいかにゃ？「……」目をそらさないでほしいにゃあ。」
「では、よろしく頼むぞ、〝姉さん〟」
「無事を祈っております（笑）〝姉さん〟」
「……そういうときだけとか、ずるいにゃあ!!」
かくして、アズリールのアズリールによるアズリールのための（＋2体）命がけの戦いが幕を開けたのであった！戦え！アズリール！敗けるな！アズリール！見守っているぞ！アズリール！ありがとう！アズリール！

―――――――――――――――――――――――――――――

尊い命（笑）が犠牲となるのが確定した後、ジブリールとラフィールはリクから連絡を受け、一足先に指定の場所まで移動していた。そこでは、リクとシュヴィがジブリールたちを見て、驚愕の表情で待機していた。
「…なあ、そいつは？」
「お初にお目にかかる…だったか？天翼種四番個体ラフィールという。まあよろしく頼む」

「彼女は、私たちと同様、あなたの野望に興味を持ち、今回より協力していただけることになりました。姉さまは天翼種の中でも戦略家でありますので、作戦がスムーズに進むことは間違いないと確信しております。」
「おいおい、そんなことを言ったらお前やアズリールもそうだろう？まあ、そういうことだ。邪魔だったか？」
「いや、逆にあまりの運の良さに歓喜で震えているよ。まさか、天翼種が3人も味方になんてな。夢なんじゃねえかって、今も思うよ。」
「そうか。それは良かった。なら、お前は一生の運を使い果たしたな。我々は、天翼種でも番外個体と呼ばれるものでね、他の者と比べて特別なんだ。簡単に言えば、殲滅力が桁違いということだ。只、力を使い果たすと、年単位で行動不能になるから、そこは注意してくれ。」
「……すまん、反応できるほどの心の余裕がねえ…（嘘だろ？俺らしくもねえが、これは驚かざるを得ないぜ…）」
「…シュヴィが相手、する。リク、会話、不可能」
「了解した。では、早速作戦会議に移ろう。まず、作戦メンバーだが……」
　しばらくして、放心状態から戻ってきたリクとを含めた人間側とジブリールとラフィールの天翼種側のなんともレアと言わざるを得ない異様な光景の中、星杯を得るべく、策を練っていった。方や、人間の天才、機凱種、方や天翼種の番外個体がそろった中での作戦会議などスムーズに進まない訳がなかった。
「よし、大まかな方向性は決まったな。だが、最終的に障害となる存在があるのは変わらねえな…」
「障害となる存在とは？」
「……あー、なんつうかな…ある奴を討つ必要があるんだ…」
「もどかしいな、誰だ？言ってみろ」
「お前らがいるから言いにくいんだが…」
「……なるほど、そういうことですか」
「ジブリールはわk……まさか…」
「ああ、察しの通り、あんたらの……ご主人様さ」

「にゃー、流石に今回は死ぬかと思ったにゃ…」
ジブリールとラフィールがアヴァントヘイムを飛び立った後、アズリールは戦神アルトシュと謁見し、苦労の末、自分たちのある程度の自由のある行動権を獲得していた。行動権を獲得するのもやはり一筋縄ではいかなかったようで、適度におだてつつ、しかしながら納得のいく根拠を提示しつつ、説得を試みた結果、なんとか成功したのだった。
「後半のアルトシュ様の威圧感が半端なかったにゃ。〝久々に〟死線を潜り抜けた気分だったにゃ。でも、うまくいって良かったにゃ。にゃふふ、これで、ジブちゃんもラフィちゃんもウチのこと見直してくれるにゃ。」
だが彼女は気づいていない、〝見直す〟ことが必要な程、落ちているのだということを…
「全く、2人とも人使いが荒いにゃあ。あ、人ではなかったにゃ。うっかりにゃあ♪それにしても、リクたちが野望をやり遂げるには、星杯が必要にゃ。でも、原作だと正規の方法では無理で、あの方を倒す必要があったにゃ。時系列はもうほとんどわからないけど、もし作戦が後者だった場合、2人はどうするのにゃ?心配にゃ。リクたちに危険がなければいいのだけどにゃ。あれ、今フラグ立ったにゃ?」
アズリールが放った何気ない一言、まさかその一言が現実になってしまうことにな…

らなかった!
「別に構わないが」「別に構いませんが」
「……え?…ちょ、ちょっと待て!あんたらの主人だろ?主人に仕えているんだろ?!そんなあっさり切り捨てちまうのか?!」
「そんなこと言われてもな…うむ…」

「ええ、別に本人がいないので言ってもよろしいかと…」
「よし、この際だから言わせてもらう。私たち2人はアルトシュ様に仕えている、表向きはな。だが実際、少なくとも緊急時はアズリールの指示を優先しているんだ。言い換えれば、私たちがあいつについて行っているといっても過言ではない。」
「それは…」
「言いたいことは分かる。だが、私たちは主のためよりかは、あいつが望むことを支持したいんだ。あいつには色々借りがある。それに、奴ほど仲間思いな、優しい奴は他の天翼種にはいないんだ。はは、まるで人間みたいなことを言っているな、私は。だが、事実私たちはあいつから様々なことを学んだんだ。最初個番体で教育担当ということもあるだろうがな。信頼に関しては、私だけではない。全天翼種がアズリールを信頼しているはずだ。事実、それにたる実績もある」
「先輩…姉さんは…天翼種が生まれてから、1体も損害を出していませんから」
「な?!…まじかよ…」
「驚き…」
「まあ、だからな、作戦に関しては遠慮なく話してくれ。そのほうがこちらも動きやすい」
「……よし、わかった!じゃあ次の作戦についてだが……」

その頃、件のアズリールはというと…
「この本、前も読んだにゃ…」
呑気に読書していた。それでいいのか!アズリール!鈍感すぎるぞ!アズリール!
彼らのいきつく先はどうなるのか、次回!アズリール!死す!
来週もまた見てくれよな!

嘘です、はい

そのまま…止まるんじゃねえぞ…

人間と天翼種が〝手を取り合う〟という、他種族が聞いたら即答しかねない現象が起きている中で、彼らと別行動をとっていたアズリールは、着々と〝その時〟に向けて準備をしていた。すべては、被害を最小限に、と言えば聞こえはいいかもしれないが、大半はリクとシュヴィの結末を変えたいというアズリールのエゴそのものであった。

「ウチがのほほんとしている内に、物語は想像以上に進行してしまっていたにゃ。それに、シュヴィちゃん（彼女の中ではマスコットと化したようだ）の死を防いだ、いや

〝防いでしまった〟ためにその意思は伝わっていないはずにゃ。…でも、そんなことは承知の上にゃ。そんな〝些細な逸脱〟なんてどうとでもなるにゃ。ウチはなんだにゃ？

只の天使じゃないにゃ。天翼種にゃ。それにその代表でもあるにゃ。アルトシュという大きな壁はあるけど、権力はあるにゃ。それを有効に使わない手立てはないにゃ。

…リク、シュヴィちゃん、待ってるにゃ。必ず〝彼ら〟を探し出してみせるのにゃ。」

人間では達するには程遠い、しかしながら〝異常〟ならばたやすい、彼女は〝確かな勝利〟へことを進めているのだった。

一方、リク一行〝も〟とある存在の居場所について情報収集を行い、探索を始めていた。

「なぁ、シュヴィ。まだ、奴らは見つからないか？」

「ん…まだ、見つか、らな、い。シュヴィは、彼ら、とは、接続が切れている、から、もう分からない。ごめ、んね…リク…」

「あ、わりぃ…そんなつもりじゃあなかったんだがな…でも、ありがとな。シュヴィのおかげで、幾分索敵も探索も楽になってる」

「ん、旦那、さんの、ために頑張、るのは、妻の、役目」

「そりゃ不変の真理だわな」「むふぅ」
「(私たちはいったい何を見せられているのだろうか。人間の考えることは全く理解できないな)」
「(ええ、そも理解などしたくはありませんが)」
「(アズリールの言っていた『リア充爆発しろ』はよく分からなかったが、それに伴う感情は何となくだが…この光景をみて理解できそうな気がするな)」
「(えー確か、『誰得』というやつでしょうか?確かに、誰も得しませんね)」
　アズリールに続き、惚気の被害者になったラフィールとジブリールの2体(ジブリールは2度目である)。基本的に人間的な思考も持ち合わせるアズリールの考えはあまり理解できない2体であったが、どうやら今回の件に関しては思うことがあったようだ。彼女らは無自覚かもしれないが、アズリールと行動することが多いからか、少なからず人間的な影響を受けているのだった。アズリール本人のあずかり知らぬところで、原作との乖離が出始めているのだった。
「ん?…?!リク!」
「どうした?シュv…まさか!いたのか?!」
「うん…結構大きな集団」
「よし!っつっても、さすがに真正面から行くのは分が悪いか…攻撃を受けたらたまったもんじゃねえな。…すまn「分かっている。私たちが先行しよう」助かるぜ」
「お姉さま、最近身体がなまっていますので、いっそ殲m「アルトシュ様にチクられるぞ、主にアズリールから」あとで、お仕置きが必要ですね、先輩には」
「(あん?もしかして、不憫なのはアズじゃねえのか?)」
「よし、まずは交渉だな。今まではだいたいアズリールが行ってきたが、私も番外個体の内の1体だ。迎撃されたとしてもなまくらごときに遅れはとらん」
「それは頼もしいな。だが、極力戦闘は避けてくれ。目的の達成には奴らの協力が必要不可欠だからな」

「フッ、了解した。華麗な交渉術をご覧に入れよう」
「(お姉さまもずいぶんとキャラが変わっていますね。先輩と同じように、〝マジ〟の時は、冗談はもちろん、笑顔もありませんからね。やはり、姉妹というのはあながち間違っていないのでしょうか?となると、私も先輩のような一面を?…これは悲しむべきでしょうか?)」
ちょっとした茶番?を交えつつ、いよいよ〝奴ら〟と邂逅を果たす時が来たのだった。リクとシュヴィは普段の余裕はどこへやら、気を引き締めているのに対し、ラフィールとジブリールは平常運転、どこ吹く風といった面立ちであった。ラフィールが近づくことにいち早く気付いた〝機体〟を機に、すべての機体がラフィール達を凝視していた。
「ちょっといいだろうか?あぁ、警戒するのは分かるが、こちらはそのつもりはない。そうだな…私たちは只〝お話〟をしに来たんだ。こちらの都合ではあるが、とある目的の
ために君たちの力が必要でね。まぁ単刀直入に言うと、私たちに力を貸してほしい。」
「……疑問、そちらの意図が分からない。当機にとってのメリット、デメリットが不鮮明である。また、その岩の陰に隠れている人と同機の存在とそちらには何らかの関係が
あると推察。それらを含めて説明を要求する」
「ふむ、こちらの意図はいざ知らずとも、当然の反応だな。時間もない。簡単に説明する。疑問があれば、後ろの同機とやらに聞くといいさ。(あとは頼んだぞシュヴィ)」
ラフィールはリクの掲げる野望について説明し、その他のことを含め疑問については、シュヴィが対応した。また、彼女は説得も行い、なんとか〝条件付き〟ではあるが、協力を取り付けることができた。
「リク、ごめん。リクの負担、大きくなっちゃった」
「なんてことないぜ、シュヴィ。俺の崇高な野望「自分でいうか?」っるせえな。いいんだよ、そのほうがやる気も出るだろ?」
「そういうものか…よくわからんな」
「興味、そちらの人間の考えることは確率的にも不可能極まりない。

だが、決して相容れることのないだろう天翼種を味方につけている。これは、確率的にも珍しい。
　協力を申し入れた天翼種の長とやらも気になる。正確な情報を得るためにも、こちらの協力は惜しまない」
「なんつーか、学ぶ姿勢でいえば、天翼種よりも話が分かる気がするな、機凱種ってやつは。シュヴィの同族だもんな。当たり前か」
「機凱種は、全種族、の中で、も合理主義、だか、ら根拠のない、ことは信じ、ない。でも、リクは、特別」
「話が分からなくて悪かったな。正直なところ、あいつが異常なんだ。天翼種の中で他種族を平等に見ているのはあいつぐらいだろうさ。私でも、根本的なところは他の
　天翼種と変わらんさ」
「そうなのか？」
「そうだ」
「今度アズリールとじっくり話してみるか。俺にとってもあいつの存在は興味がある」
「リク、浮気、ダメ」
「?!ちげえって！俺にはシュヴィしかいねえよ！浮気なんてもってのほかだって！」
「妻は、浮気には、容赦、しない」
「また始まりましたか。ラフィールお姉さま、そろそろ戻りませんか？アルトシュ様に感づかれないうちに」
「そうだな。結局アズリールは来なかったからな。説得はどうなったのか気になる」
「ええ。では、皆さま、私たちはこの辺で失礼します。また何かあれば、〝先輩〟の方にお願いします」
「ああ、要があれば〝あいつ〟に頼む、ではな」
「……信頼されてるのか、パしられているのか、もうよく分かんねえな」
「「同意」」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

同時刻、アヴァントヘイムにて…

「にゃぁ〜、ラフィちゃんたち、ぅまくいっているかにゃ？説得の後、気になった本が読みたいがためにサボったなんて、本人たちの前で言えないｎ「ほう、ずいぶんなご身分だな、長殿？」………いつからいたにゃ？」

「いや、ついさっきだが？瞬間移動の魔法があるのを知らぬお前ではあるまい」

「別に、ちゃんと説得はしたにゃ。結果なんとかってところにゃ」

「そうですか、それはよかったたですね」

「他人事じゃないかにゃ？ちなみにウチのメンタルはぼろぼろにゃ。誰かに膝枕してもらわないと立ち直れないｎ「嫌ですが何か？」………」

「それに、本を読む余裕がある方が言えるようなセリフではないように思えますが？」

「………あれ？目から塩水が…」

「ジブリール、その辺にしておけ。あのアルトシュ様の説得に成功したんだ。並大抵のことではないだろう。精神的なダメージは相応と言えるだろう」

「…はぁ、これで何百、いや、何千回目でしょう？全く、私も甘くなったものですね、まぁ、その功労の分は労って差し上げましょう…どうぞ」

「にゃぁ〜〜…やっぱり、ジブちゃんの太ももは最高ｎ「蹴り飛ばしますよ？」いや〜疲れがとれるにゃー（こんなこと、頻繁とはいかないけど、してもらっているなんて前世のジブちゃんファンが聞いたら血眼確定にゃ。明日からまた頑張れるにゃ）」

「…全く、長とあろうお方がなんてだらしがない顔をしているのやら。（今回は、直訴ということで一時はどうなるかと思いましたが…無事でよかったたです、〝姉さん〟）」

「（こういう光景を見ると、本当に仲がいいとしみじみと思う。私も負

けてはいないがな。こいつらといると、本当に退屈しないな…)」

親の心子知らずならぬ妹の心姉しらずとはこのことか。〝普段と何ら変わらぬ〟日常を過ごす天使たち。過去も今もこれから変わらずに過ごしていくのだろう。先に平和な未来が待っていることを願っている。

(終……ではありません)